

後期・期末考査の後半戦になりました。

～残り2日間しっかり受験しましょう。～

文責 学校長



先週の木曜日(13日)から始まった1・2年生の後期期末考査も今日から後半戦に入り、明日までとなりました。週末の土日に試験勉強は十分にできたでしょうか。残り2日間しっかり受験しましょう。また、考査が終わると各教科の担当の先生方は成績を出す段階になります。後期の中間考査の成績に加え、**日頃の授業中の取り組み具合(関心・意欲・態度)や課題等の提出状況・小テストの成績等を加味して総合的に成績が出されること**になります。課題の提出の締切期限までに課題を提出しておくことは**単位修得の絶対条件**です。もしまだ提出していない課題がありましたら、考査が終わってホッとせずに課題に取り組みましょう。

1 3年生はクラスマッチを行いました。

2月6日(木)に、3年生は高校生活最後のクラスマッチに汗を流しました。女子はドッジボール、男子はバスケットボールをそれぞれ楽しみました。高校生活も残りわずかとなりました。



2 1年生の育てた野菜を収穫し販売しました。

1年生の「体験学習基礎」の「果樹・野菜栽培実習」で育てた野菜を収穫し、道の駅厳木で販売しました。これまでに大根・白菜・ブロッコリーを収穫し、道の駅や職員室等で購入していただきました。収穫後の畑には、新たに玉ねぎの苗を植えています。こちらは新年度の5月頃に新1年生が収穫し、販売する予定です。



3 今日の一言・・・福沢諭吉と指原莉乃(大分県出身)の言葉です。

○社会共存の道は、人々自ら権利をまもり幸福を求めると同時に、他人の権利幸福を尊重し、いやしくもこれを侵すことなく、もって自他の独立自尊を傷つけざるにあり。

○賢人と愚人との別は、学ぶと学ばざるとによって出来るものない。

【解説】「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」で始まる福沢諭吉の著書『学問のすすめ』の中の言葉です。『学問のすすめ』は、1872年から刊行が始まりました。生まれながらに上下の差はないのに、**貧富の差や身分の差ができるのは、学問があるかないかが原因**と説明しています。庶民でも買いやすく、17冊に分けて1冊の値段を安くしたり、漢字には読み仮名を振ったりして、たくさんの読者を得、300万部のベストセラーとなりました。



【福沢諭吉について】慶應義塾(旧:蘭学塾、現在の慶應義塾大学はじめ系列校)の創設者であり、商法講習所(のちの一橋大学)、神戸商業講習所(のちの神戸商業高校)、伝染病研究所(現:東京大学医科学研究所)、土筆ヶ岡養生園(現:東京大学医科学研究所附属病院)の創設にも尽力した。新聞『時事新報』の創刊者。ほかに東京学士会院(現:日本学士院)初代会長を務めた。そうした業績を基に「明治六大教育家」として列される。昭和59年(1984年)11月1日発行分から日本銀行券一万円紙幣の表面の肖像に採用されている。(参考:Wikipediaより)

○プライドなんて捨てたほうが、いろいろ得だと思います。「なんで私がこんなこと。やいたくないよ」と思う仕事はいっぱいあるけど、やるかやらないかなら、やったほうが得です。

○ネガティブなことを、人前で口にするのはよくないと思います。周りをネガティブな雰囲気にしてしまうと、その雰囲気が、自分に返って来ちゃうから。

【解説】国民的アイドルグループAKBグループの顔として活躍した指原莉乃さんの何事にもポジティブに取り組む姿勢や信念が窺える言葉です。秋元康氏にAKB48からHKT48への移籍を命じられてもめげることなくチームを牽引した直向きな姿は、まさにアイドルの鏡として認められ総選挙でも女王の座を手に入れました。グループを卒業後もバラエティ番組や報道番組のコメンテーターとして活躍中です。



【指原莉乃について】1992年生まれ。大分県出身。2019年4月に行われた卒業コンサートでHKT48を卒業。AKBグループ時代には総選挙で**4度女王の座に輝いた**。現在は様々なバラエティ番組で活躍。また、アイドルグループ『=LOVE(イコールラブ)』のプロデュースも行う。(参考:「太田プロダクション」HPより)

4 今日の一冊・・・今回の一冊は、大分県出身の小野正嗣の『九年前の祈り』です。

三十五になるさなえは、幼い息子の希敏(ケビン)をつれてこの海辺の小さな集落に戻ってきた。希敏の父、カナダ人のフレデリックは希敏が一歳になる頃、美しい顔立ちだけを息子に残し、母子の前から姿を消してしまっただ。何かのスイッチが入ると引きちぎられたミミズのようにのたうちまわり大騒ぎする息子を持って余しながら、さなえが懐かしく思い出したのは、九年前の「みっちゃん姉」の言葉だった——。九年の時を経て重なり合う二人の女性の思い。痛みと優しさに満ちた〈母と子〉の物語。表題作「九年前の祈り」他、四作を収録。芥川賞受賞作文庫化。(「講談社BOOK倶楽部」より)



【解説】芥川賞を取った表題作「九年前の祈り」と「ウミガメの夜」・「お見舞い」・「悪の華」の3つの短編からなる一冊です。特に驚くような展開や事件もなく淡々と語られる過去の回想が、頻繁に現在と交錯する叙述形式になっており、頁を追ううちに、次第に現在が過去と、そして異なる人物の抱える苦しみと、境界なく一体となって重なっていく独特の世界観にいつの間にか引き込まれていきます。表題作と他の3編の短編が、実は符合するスタイルになっており、「えっ？」と思わせるスタイルによって筆者独自の世界観がいっそう重ねられていきます。

【作者・小野正嗣について】大分県蒲江町(現佐伯市)出身。東京大学教養学部卒業。同大学院総合文化研究科言語情報科学専攻博士課程単位取得退学。1996年、新潮学生小説コンクールでデビュー。2001年、「水に埋もれる墓」で第12回朝日新人文学賞受賞。02年、『にぎやかな湾に背負われた船』で第15回三島由紀夫賞受賞。同年、第一回東京大学総長賞受賞。03年、「水死人の帰還」で第128回芥川賞候補。08年、「マイクロバス」で第139回芥川賞候補。13年、「獅子渡り鼻」で第148回芥川賞候補。同年、早稲田大学坪内逍遙大賞奨励賞を受賞し、『獅子渡り鼻』で第35回野間文芸新人賞候補。06年に東京大学教養学部助手、07年に明治学院大学文学部専任講師に就任、13年准教授。14年立教大学文学部文学科文芸・思想専修准教授。その他の著作に『森のはずれで』『線路と川と母のまじわるところ』など多数。本作『九年前の祈り』で第152回芥川賞受賞。(参考: Wikipedia より)

5 日本全県味めぐり・・・第43回は大分県です。

大分県のグルメと言えば、「日田やきそば」「りゅうきゅう」「関あじ・関さば」「中津からあげ丼」を挙げたい。まず「日田やきそば」。日田市内のラーメン店のメニューに輝くのが「やきそば」の文字。店内には、ラーメン店なのに鉄板を発見！そこで作られるメニューこそ「日田やきそば」です。こだわりはずばり“焼き具合”。厚い鉄板で表面がカリカリになるまで麺を強火で焼き、各店秘伝のソースで仕上げます。具には大量のもやしと豚肉が投入され、パリッとした麺ともやしのシャキシャキした食感がハーモニーを奏でます。次に「りゅうきゅう」。沖縄の俗称を持ちながら、大分の名物料理である「りゅうきゅう」。大分でとれるブリやさば、あじといった鮮魚を、醤油や生姜などの入った漬けに浸す。それらをしそや白ごまなどと一緒にご飯のせたものを琉球丼といいます。茶湯をかけて茶漬けにする食べ方もあるそうです。名前の由来は諸説ありますが、大分の漁師が沖縄の漁師に作り方を聞き、持ち帰ったことからその名がつけられたとも言われています。今ではすっかり大分の名物料理として定着しています。そして「関あじ・関さば」。瀬戸内海と太平洋の水塊がぶつかりあう豊後水道で、一本釣りによりとれるマアジ・マサバの事をブランド化し「関あじ」「関さば」と呼びます。そのうまさ、歯ごたえのよさから、高級魚として重宝されています。最後に、「中津からあげ丼」唐揚げの聖地、大分県中津市の「中津からあげ」と大分の郷土料理・鶏めしを使った鶏大国「大分」がどっさりつまった丼ぶり！です。



【ざびえる】1551年、豊後の国にやってきた宣教師フランシスコ・ザビエルは大友宗麟の庇護を受け、キリスト教の教えを説いただけでなく病院や学校の建設にも貢献し、大分に南蛮文化の花を開かせました。「ざびえる」は、バター風味豊かな洋菓子風の生地には和風の白餡を包んだものと、ラムレーズン入りの白餡を包んだものの二種類があります。今も大分土産の定番です。



【やせうま】小麦粉で作った平たい麺状のものにきなこ砂糖をまぶして食べる大分の郷土料理。あたたかいまま、あるいは冷やして、甘いお菓子感覚で家庭でよく食べられます。「やせうま」というユニークな名称には諸説があり、一番有力な説は、平安時代貴族が乳母の八瀬に作られたもののおいしかったため「八瀬、うま」と乳母の八瀬にねだったためというものです。

6 保護者の皆様へ・・・進路ガイダンス・体験学習基礎発表会を開催。

今週木曜日(20日)には1・2年生の「進路ガイダンス」が予定されています。欠席することなく受講できますように登校させてください。また、来週水曜日(26日)14時50分から視聴覚教室で1年生の「体験学習基礎発表会」を開催します。後期に取り組んだ3つのプログラムごとの学習内容の報告会です。保護者の方の参観も大歓迎です。